

庭野平和財団活動助成 活動終了報告書

a. 組織名

特定非営利活動法人 開発教育協会

b. 事業名

ユースのエンパワメントをめざした教育実践普及推進事業～不公正な社会の変革を目指して

c. コード番号

15-A-404

d. 活動の目的

世界中で貧困や格差の拡大、環境破壊、暴力や人権侵害等が蔓延している現在、そうした問題解決のための取り組みの重要性が、世界的に認識されるようになってきている。2015年には「持続可能な開発目標（SDGs）」が合意され、不公正な社会構造や持続可能性を損ねる社会・経済・環境面の問題に、先進国・途上国を問わず世界中で共通して取り組むべきとされている。

日本に暮らす高校生・大学生等のユースの中でも、周囲の人からの暴力や排除、経済格差や社会的不平等による教育機会や就労機会の喪失といった厳しい現実さらされている人も少なくない。さらに、時にそれが障害者や外国ルーツの人々など、自分とは「異質」でマイノリティの立場に置かれた他者への排除や暴力へと向かう状況も見られる。

このような状況下で、日本のユースにとって本当に必要な教育とは、世界や日本を取り巻く問題状況やその背景にある社会構造から生じる目の前の厳しい現実を受け入れ、不公正な社会のありように適応し、他者との競争に打ち勝つことを目的とするものではない。現実社会の不公正を認識し、望ましい社会のありかたを考え、オルタナティブな社会づくりに参加していこうという、エンパワメントに結び付くような教育であると言える。ところが、教育関係者は、そうした課題がユースにとって日常的に直面する困難となって立ち現われている現実を目の前にして、問題意識は感じながらも、教育実践においては対応しあぐねているのが現実である。そのことは、たとえば「貧困や格差、社会的排除に関する授業は、以前と比べ、クラスに貧困家庭の子や外国ルーツの子がいることが多くなったため、実施しにくくなった」といった教育関係者の声が当会にもたびたび届くようになったことから、見てとることができる。

そこで本活動では、ユース世代の人々を対象とした、地球的課題の解決とそれを生み出す不公正な社会を変革していけるためのエンパワメントに結び付くことをねらいとした教育機会が増えるよう、その教育実践の支援を目的に実施する。

e. 活動の内容と方法

本事業は、「1. 教材・資料の作成」「2. 教育実践者向けの研修と実践例の収集」「3. 全国への普及・定着・発展」の3段階を計画した。このうち、本助成期間内で1の教材作成と2の活動に取り組んだ。

「1. 教材・資料の作成」では、広く学校内外の教育現場で活用できるユースのエンパワメントと社会参加のための参加型学習教材を作成。教材の作成に当たっては、学校やNPO、自治体など幅広い教育現場でユースと接する人々から協力と助言を得た。併せて、グローバル化が進む私たちの社会を読み解く視点を示し、未来のありかたを考えるための“道標”を示した副読本の発行に向け、研究会を形成して研究・執筆活動を行った。

「2. 教育実践者向けの研修と実践例の収集」では、上記1で作成した教材の活用方法や、エンパワメントにつながる教育実践の意義を教育実践者に理解してもらえるよう、各地でワークショップを実施した。さらに、実践事例を、ユースの意見や反応とともにウェブサイト上で公開、ワークショップに参加できなかった他の教育実践者が、実践の参考にできるように整備した。なお、各地のセミナー・ワークショップは、現地の教員グループやNPOと協働して実施した。

「3. 全国への普及・定着・発展」については、1で作成した教材の活用方法に関する研修会実施を、2で協働した教員・NPO等を中心に各地域の教育実践者に働きかけたうえで開催する。さらに、地域を超えて、こうした教育活動に関心のある実践者同士が、実践共有と各地の研修会のふりかえりや課題共有ができる場を設ける。これにより、ユースを対象にしたエンパワメントに結びつく教育が、継続的に普及・発展するための基盤を構築する。

f. 活動の実施経過

～2015年10月 教材構成案の作成（本助成活動以前）

2015年11月～2016年4月 教材アクティビティ案の作成

4月～6月 教材案の施行と改善提案の協力依頼

6月～7月 教材執筆・編集

8月 教材発行、教材活用のためのワークショップ（全国各地からの実践者対象）

9月 教材活用のためのワークショップ（仙台、大阪）

10月 実践報告まとめ（ウェブ掲載用）

11月～ 副読本の発行、実践者向け研修会実施（本助成活動以降）

f-1) 教材構成案・アクティビティ案の作成

本助成期間以前に、教育現場に係るメンバーから成る教材作成チームを立ち上げ、会議をもちながら教材の趣旨と全体構成案を作成した。全体構成案は、過去に発行された類似のテーマを扱った教材を比較研究しながら、現在のユース世代のエンパワメントにつながりうるには、どのような学習の切り口が適切かについて議論し作成した。その結果、学習の冒頭で貧困や格差等の不公正を真正面から扱うということではなく、まず「自分自身は」どのような社会に生きていきたいか、という個人の考えを確認することから始めることとした。その理由として、生徒・学生にとって貧困が身近となっている現在、ユース世代の間で貧困が構造的問題ではなく個人や個別の家族自身の問題として捉えられる傾向が強く、身近な貧困や格差に関する学習は若者たちの自尊心を奪いがちという意見が、教材作成メンバーから出されたためである。さらに、そうした状況の中では、若者たちは「こうした生き方をしたい」「このような社会に暮らしたい」といった個人の夢や希望を語る主体だという認識を持ちづらくさせられているのではないかと、という問題意識も出された。そこで、「よりよい世界・社会のありかた」や「開発のありかた」を考えるための前段階として、まずは「自分自身にとって豊かな社会とはどのような社会か」を考えてもらうことが必要であるという結論に至った。加えて、未来の社会のありかたを、持続可能な開発目標（SDGs）と関連付けながら考えられる内容とすることを目指した。

全体構成案を決めた段階で、アクティビティ案をメンバーで分担して作成した。当会として、「よりよい社会のありかた」や「開発のありかた」を考えるための参加型のアクティビティの蓄積は当会にいくつかあったので、それらを参考に、現在の時代状況に見合った学習となりうるかどうか、学習者のディスエンパワメントにつながらないかどうか、などに注意しながら変更を加え、掲載の可否を検討していった。一方で、「自分自身にとって豊かな社会とはどのような社会か」を考えるアクティビティは今回一からの作成となり、繰り返し試行と検討を重ねた。

f-2) 教材案の施行と改善提案の協力依頼

2016年4月には教材に掲載するアクティビティ案が一通り出そろった頃、外部の教育実践者にアクティ

ビティ案の実践と案に対するフィードバックを依頼した。結果、期間内に中学・高校・大学・ユース団体それぞれから実践報告と内容へのフィードバックを得ることができた。また、NGOスタッフ研修における実践報告も個別に依頼し、協力を頂くことができた。

各協力者には、対象者の学年や人数、学習のながれなど基本情報とともに、「どのような学習のねらいや位置づけで実施したか」「生徒の反応と感想」「(進め方やワークシートなど)対象に合わせて工夫や変更をしたこと」などを具体的に尋ね、頂いた意見を参考に、どのような現場でも活用しやすい教材となるよう改善につなげていった。協力依頼先の中には、勤務校の時間の都合でアクティビティ案の実践はできないが、趣旨内容に関心を持ち、内容に対するコメントのみを送付してくれた実践者もあった。こうしたさまざまな協力者の意見やフィードバックから、例えば、教材構成についてはアクティビティの順序を変更し、個別のアクティビティについてはワークシートの追加や表現を簡易化するなど、いくつかの変更を加えた。

また、各協力者から実践報告を寄せていただく中で、「内容がむずかしく生徒が最初はあまり話し合いをしないかと思ったが、やってみたらたくさん話をしていた」「自分の進路と関連させて話していた」など、協力者自身が生徒の様子に関し興味深く思ったという旨のコメントも寄せられ、本事業において、今後さまざまな教育現場で本教材を展開することの可能性を感じさせられた。こうした生徒や協力者のコメントも含め、寄せていただいた実践事例を本教材へ掲載した。

f-3) 教材活用のためのワークショップ実施

f-3-①) 全国の教育実践者向け

2016年8月6日(土)に「開発教育全国研究集会」のプログラムとして実施し、全国各地の教員、NPO関係者、学生など35名の参加があった。当日はアイスブレイキングをした後、ある場面を写した写真を4つの側面から分析する「コンパス分析」と、各自の豊かさに関する価値観を受け止め合う「豊かな社会にとって大切なこと」を中心に実施した。100分という短時間ではあったが、終了後の感想を見ると参加者は大方本教材に興味を持った様子が見えかけた。また、教育実践者向けのワークショップを実施する上で今後取り組むべき課題もいくつか見出すことができた。



f-3-②) 仙台・学生ほか

2016年9月19日(祝)13:30~16:00、NPO法人IVYのユースチームであるIVY Youthとの共催で仙台国際センターにてワークショップを実施した。当日は学生を中心に20名の参加があった。IVY YOUTHによるアイスブレイキングのあと、それぞれのもつ“開発”のイメージを共有した。そして、写真を使用した「コンパス分析」と、社会参加のあり方を考える「参加のはしご」のアクティビティを実施した。今回は、事前に同団体と相談し、「コンパス分析」に使用する写真は、半分は同団体の活動地であるカンボジアや仙台周辺の写真を用意していただいた。実際、参加者の話し合いの様子を見ると、自分たちに身近な仙台の写真のほうが、出される意見や問題意識がより多く、また自分の経験を交えるなど具体的なもので、話し合いも深めることができたようだ。この点は、以降のワークショップ実施の参考となった。

参加者の感想では、「『参加のはしご』に関しては、国際理解教育部門のリーダーとして毎回行うWSに自分は確実に(参加度の高い:報告者注)⑦⑧で参加できていても、周りや後輩はどうなのだろう…。と少し考えてしまった。IVY youth全体を⑦や⑧、⑥のような活動にしていきたいし、していくべきだと思った」「ワークショップってなんでやるんだろうと考えることができた。開発という言葉に惑わされない。8段階の参加は相互に思いやりに達成できないと思った」など、各自の立場から今後の活動への参加の仕方にもつなげて考えてもらえる機会となったようだ。また、自分がワークショップを進行する

際のヒントを得た、という感想もあった。

IVY Youthが実施しているようなユース同士が学びあう場は重要なエンパワメントの機会と考える。今後もIVY Youthの経験に学びながら、当会としても本教材が他のユースの勉強会でも広く活用されるよう、働きかけ及び支援していきたい。

f-3-③) 大阪・教員ほか教育実践者向け

2016年9月24日(土) 14:00~17:00は、財団法人公害地域再生センター(あおぞら財団)との共催で、教育実践者向けのワークショップを開催した。当日は、教員やNPO関係者などの教育実践者38名が参加した。IVY Youthとのワークショップの経験から、「コンパス分析」で使用する写真は同財団の活動に関連する物を事前に準備してもらった。アイスブレイキングに続き、「コンパス分析」「豊かな社会にとって大切なこと」「開発ランキング」の内容で行った。「開発ランキング」はどのような開発を優先するかについて、グループにおいて合意形成をする活動だが、今回はグループを一つの国と考えた時に「優先したい開発課題は何か」という視点で話し合ってもらった。

参加者は話し合いに慣れている人もそうでもない方もいたため、特定の人のみが発言することがないように、お互いに「否定しない」ことや「他の意見について評価や判断をしない」ことを随時お願いしながら進化した。「開発ランキング」では最後まで合意形成に至らないグループも見られ、議論は白熱していた。



ふりかえりで「自分自身の参加度」について記入してもらったところ、「発言は積極的だったが人の意見をしっかり聞けたが自信がない」といったコメントがあり、自分自身の参加の態度についても考えてもらう機会ともなったと考えられる。また「これからの社会では『0か100か』と求めるのではなく、『〇と×から△を見つけ出す』ことが重要だと思うので、中学校現場からこのような活動を経験させたいと思った。」との感想も見られ、本教材の活用を教育現場に働きかけていくことの意義を確認することができた。

g. 活動の成果

g-1) 教材『豊かさと開発~Development for the Future』発行と頒布

2016年8月に1000部を発行、頒布しているところである。頒布先はf-3)のワークショップ参加者をはじめ、教員やNPO関係者等となっている。本教材の内容は次のとおりである。

=====

- ◆本書のねらいと使い方
- ◆参加型学習について
- ◆解説：豊かさへのエンパワメント(田中治彦)
- ◆アクティビティ編

[話す] 「豊かな社会」にとって大切なこと(カードをつかったワーク)

[話す] なんのための開発?(ダイヤモンドランキング)

[分析する] 写真で話す、私たちの世界(付録CDの写真をつかったコンパス分析)

[分析する] 「力の剥奪」としての貧困(レーダーチャート)

[分析する] 参加のはしご

[構想する・行動する] 未来予想図

◆実践事例編

- ・中学校での実践 「豊かな社会にとって大切なこと」
- ・高校での実践 「私にとって『豊かな社会』に必要なこと」



- ・高校での実践 「『こうなっていきたい社会』ランキング」「未来予想図」
- ・大学での実践 「豊かな社会にとって大切なこと」)
- ・NPO・ユース活動での実践 「豊かな社会にとって大切なこと」「レーダーチャート」
- ・NGO研修での実践 「コンパス分析」

◆付属CD「コンパス分析」で使用できる写真を21枚収録

=====

g-2) 豊かさや開発のありかたを考える参加型学習への関心の広がり

f-3) で報告したとおり、教育実践者及びユース向けに、本教材の活用のためのワークショップを開催、3回で延べ93名の参加者を得ることができた。これらの参加者の中には、そもそも、貧困や格差といった個別の課題や、開発のあり方を考える学習にそれほど高い関心を持っていなかった方も、少なからずいた。しかしどのワークショップでも、終了時には、参加型の手法で現代の複雑な課題を誰もが話し合うことができるという点に多くの参加者が関心を示し、「自分もやってみたい」とコメントしていた。今後、これらの参加者が各地域で本教材を活用することが期待できる。

また、上述のf-2) での協力者に加え、今回は協力を見送った協力依頼先も、この機会をきっかけに本教材に関心を示し、中にはすでに実践してみたという声も届いている。たとえばIVY YOUTHは、f-2) の教材案の施行と改善のプロセスにも協力いただいたが、協力依頼の当初から本教材内容に関心が高く、IVY Youthとして本教材を活用した勉強会を継続して計画しているということだった。

g-3) 実践事例のウェブ上での公開

上述のf-3) で報告したワークショップの実践事例を、参加者の声や反応とともにウェブサイトに掲載した。それらのURLは次の通りである。

<http://www.dear.or.jp/case/menu30.html>

<http://www.dear.or.jp/case/menu29.html>

ウェブサイトへの実践事例掲載の目的は、本教材に関心を持った人が、学習プログラムを作成する際の参考にしてもらうためである。本教材にも実践事例が掲載されているものの、その数や内容は限られているため、ウェブサイトではそれらを補うように学習プログラムを提示したいと考えている。今後は、ユースを対象とした実践事例を追加して、実践者の側面支援としていきたい。

h. 今後の課題

h-1) 副読本の作成・発行

本活動の成果物である教材を相互に補完するものとして、副読本を編集しているところである。貧困等のグローバルイシューを扱う教育分野の専門家や研究者からなる研究会を形成し、研究・執筆した。副読本は、本教材を活用するための実践者への解説書という位置づけではあるが、さまざまな個別イシューの解説という体裁ではなく、国内外の時事的な問題をどう読み解くかについて、オルタナティブな視点を示しながら説明をしている。

ユース世代の人々が、これまでの単なる延長線に止まらない未来のありかたを考えるにあたっては、現在の世界のありようをどのような視点から理解し読み解いていくかが重要となる。そこには、構造的な理解や歴史的視点とともに、現在の世界のありようが、誰にとって望ましく、また誰にとってのどのような不公正があるのか、という点に目を向けることも必要だと考えている。本書では、世界を見るオルタナティブな視点を国内外の時事的問題と関連付けながら紹介し、現在起きているさまざまな事象を読み解く多様な視点を提供する内容となる予定である。

従来、貧困等のグローバルな課題を扱う参加型学習に対する批判として、「そもそも、教育実践者自体がよく知らない課題については、授業等で扱えばいい」ことや、「参加型で未来のありかたを話し合うだけでは、意見を言いつつなしで、表面的な意見交換で終わってしまい、学習が深まらない」といった点が

指摘されていた。そこで、本教材とともにこの副読本を活用することで、教育実践者にとっては、本教材を活用して自分自身があまりなじみのない学習テーマや学習内容を扱うことに対するハードルを下げる役割を果たし、学習者にとっては、単なるイベントや単発の学習に終わらずに、理解をより深め視野を広げていくことが期待できる。

具体的には、この副読本が発行された暁には次のように活用されることを想定している。一つは、教育実践者が本教材実践の際に参考にすることである。とりわけ、実践者自身があまり関心を持っていないテーマや、自分とは異なる見方や考え方について理解を広げ深めたうえで、実践に臨むことが期待される。二つ目は、本教材を活用したワークショップを経た生徒や学生が、そこで関心を持った課題への理解を、本書を読むことでより深め、一連の知識として整理し定着させることである。この場合、学習後の個別レポート課題や、グループ学習の参考資料として活用することもでき、その後さらにクラスで発表や意見交換するなどの方法で学習をより深めていくことも可能である。

h-2) 実践者向けの研修内容

本事業では、今後、実践者向けに本教材の活用方法を学ぶための研修を各地で実施していくが、その研修内容については注意深く検討していくことが必要だと考えている。本助成活動として、教材活用のためのワークショップを既に数回実施したが、そこに参加した教育実践者からは、日ごろから自分の考える「常識」や、「多数派」「主流派」の意見に無意識に沿って学習プロセスを組み立てていることが感じられる言動や、参加型の手法がある一定の方法論だと理解されている様子が、たびたび見て取れた。

たとえば、あるワークショップにおいては「様々な視点が出されたものを、次にどう展開したらよいか」や「うちの学生にやると出される意見が偏りそうで、こちらの意図したものが出されないと考えらえるが、その場合はどうするのか」などの質問が出された。これらの点は、本教材に限らず、広く参加型学習一般についての実践者研修でも度々出される質問である。参加型学習の本来の意義は、参加者（学習者）主体で学びが進行し、実践者がそうした学びのプロセスをサポートできることが必要だ。つまり、初めから実践者がすべての学習プロセスや結果を決めておくのではなく、学習のプロセスの中から学習者の視点や考えをくみ取って、それに応じて学習プロセスを組み立てることが求められる。ところが、こうした質問が出されるということは、あらかじめ学習プログラム全体を決めて学習から「得られるもの」を想定しておきたい、という従来型の方法による実践が意図されていると言える。また、参加型学習が「手法」としてのみ捉えられ、学習者のエンパワメントのためには学習のありかたそのものを転換する必要があるという点が、理解されていないということでもあるだろう。

一方、他のワークショップでは、ある教員の参加者が学習のふりかえりで「自分の意見を強く持ちすぎ、他の人の意見を受け入れることが少なかった」と自身の態度について記入することがあった。日々忙しくしている教員は、日ごろ、自分自身について考える機会も時間も少ないと考えられるが、このワークショップがそのような内省の機会を提供する場ともなっていた。

本活動は、ユースのエンパワメントにつながる学習を目指すものである。そのためには、学習のプロセスにおいて学習者が主体であることが不可欠だ。一方で、教育実践者は、無意識のうちに「こうあるべき」姿や自分自身の「あたりまえ」を「答え」として用意してしまう傾向を持つ。そうした態度を学習者は敏感に察知し、自分で考えることよりも教育実践者のもつ「答え」に合わせることを優先させてしまう。これでは、エンパワメントには結びつかない。このことに、教育実践者が自覚的になる必要がある。したがって、今後、実践者向けに本教材の活用について研修するにあたり、狭い意味での学習手法の伝達にとどまらず、本教材の活用を通して実践者自身も自らの「あたりまえ」を崩し、自分自身に関する気づきを得る機会ともすることで、学習者の視点で学習を進めることの意義の理解へとつなげることをも、目指していく必要があると考える。

以上